フルンボイル調査旅行（1）

吉　田　順　一

はじめに

本稿は、本誌130号（2015年3月）に掲載された「赤峰市（旧ジョーオダ盟）調査旅行（2）－アルホルチン旗調査及び通遼市経由ハイラル到着まで－」の続きである。

前回は、1995年8月7日朝7時半にフルンボイル盟（現在のフルンボイル市）の主都であるハイラル（海拉爾）の駅に到着したところまで記した。

ハイラル駅のプラットホームには、日本に留学しているドルナが出迎えてくれた。トヨタのマイクロバスにわれわれの荷を積み、フルンボイル=ホテルへ。ドルナの父ダシドルジ氏が待っていた。すぐに日程の打ち合わせ。北京から帰途につくのだが、そのための急務は8月17日北京行きの航空便のチケットの確保である。その入手が困難なのである。理由は、7-8月には北京など南方の種々の組織の幹部連が涼しいハイラルに家族を伴ってやって来て会議を開くからだという。1991年夏に岡山大学の研究者とこの地に来たときも、この種の会議が多くて飛行機が混み、往復ともに航空チケットが取れず、やむなく列車で往復。車中4泊、フルンボイル3泊という最悪の日程となり、実質的な調査が何もできなかった（吉田「フルンボイル紀行」『日本とモンゴル』105号）。

次いで調査旅行の足となる車の手配を、ヒシクトクトホ教授とゲレルトがフルンボイルの民族事務委員会を訪れて頼んだが、やはりと言うべきか、車はないと言われた。やむなく車の手配をダシドルジ氏に頼んだ。そしてフルンボイル滞在中の訪問先と日程も定めた。

朝食後、部屋で洗濯。昼食はホテルのレストランでとったが、雅座つまり個室はみな会議に来た幹部連の宴席となっていたから、私たちは大食堂に坐った。

フルンボイル=ホテルの施設は、私がこれまで内モンゴル各地で泊まったホテルのなかで最も整っていた。トイレに問題がなく、昼でも湯が出た。ただしテレビは映らなかった。

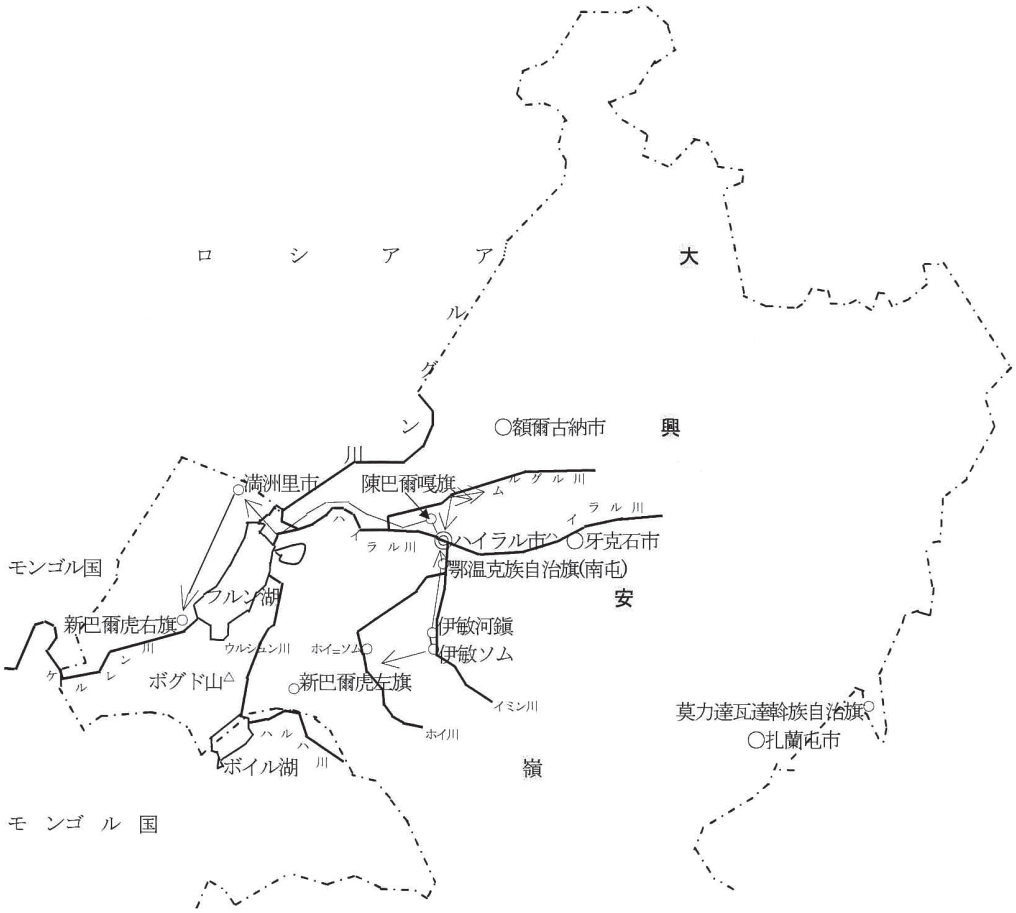
14時半、ゲレルトは、私の外国人旅行許可証をもらいに公安に出かけ、私とヒシク教授は市内の文化出版社を訪れた。ビチクト副社長によれば、昨年私の教え子の宇野伸浩、柳澤明、井上治、永井匠君たちのほか、田中克彦氏や若松寛氏も来たことがあると言う。この出版社は質のよい本を出してきたから、研究者が訪れたのである。

夕方、ドルナに案内されて彼女の祖父アルバジン氏を訪ねた。同氏は戦前久留米医専に在学し、戦後の1956年に内モンゴル自治区で最初の大学助教授となり、次いで教授となっ

た。いわゆる文化大革命によって左耳の聴力を失った。文革終息後、フフホトにある内モンゴル医学院に招かれ、内モンゴルにおける医学の重鎮として功績をあげた。同氏は、久留米医専時代、私の妻の母の従兄弟との知り合いであったらしいので、私は親近感を抱いた。ダシドルジ氏はフルンボイル盟長という要職を退いて間がなかった。

アルバジン氏らはブリヤト人であり、ロシヤのチタ方面に暮らしていたが、ソビエト革命の混乱時に国境を越えてフルンボイルに逃れ、ハイラルの南方エヴェンキ族自治旗のシネ川流域に住みつき、その後牧地をイミン川の西と南に拡げて今に至っている〔平成10年度～ 12年度科研費補助金・基盤研究（C）（2）研究成果報告書『近現代モンゴル牧畜社会の研究（エヴェンキ族自治旗イミン・ソムのオールド族の牧畜）』2001年11月、10-13頁〕。

彼らの南隣りはオールド人の牧地だから、オールド人とブリヤト人の間で婚姻関係が生じ、ゲレルト君の父親はオールド人だが、その妻はブリヤト人である。またオールド人はエヴェンキ人とも隣接して暮らしているから、両者の間でも婚姻関係が生じた。例えばゲレルト君の妻はエヴェンキ人である。



フルンボイル調査径路図

8月8日　6時起床。8時にゲレルト君が妻とやって来た。彼の両親が住むエヴェンキ族自治旗の主都（南屯）から来たのである。南屯からハイラル市まで、7㎞程度の距離である。

この日も、上述した事情から我々が乗る車の確保が難しく、ドルナがロシヤ製のタクシーを運賃1日300元で見つけてきた。数十秒後ゲレルトは北京ジープのタクシーを見つけてきた。このわずかな時間差が予定を大きく狂わせる原因となった。ロシヤ車で本日の目的地のホーチン＝バルガ（陳巴爾虎）旗（21429平方㎞。四国より大きい）に向かったが、車の給水ベルトの具合が不調で、何度も停車して修理し、その上道を間違え、目的地のはるか手前でオーバーヒートし、動かなくなったのである。そばに「金帳」と称する観光施設があり、その副社長がゲレルトの友人であるとわかり、ジープを借りて少し先にある煉瓦製ゲル型バイシン（固定家屋）を訪れて聞き取りをしたが、すでに12時を過ぎていた。

その住人は、同旗のバヤンハダ＝ソムのフフウンドル＝ガチャーの牧民ドンボさん（64歳）と妻ドルゴルさん（63歳）。息子、娘が2人ずつおり、長男に2子、次男に1子がいる。

このガチャーの政府所在地は、ハイラル市からエルグネ右旗（現エルグネ市）方向に約30km北上してムルグル川（興安嶺から西南流してハイラル川に注ぐ）に架かる橋を渡ったすぐそばである。バヤンハダ＝ソムの政府所在地は、そこから約30km前後下った川の北側にある。ドンボさんのバイシン（固定家屋）は、エルグネ右旗に向かう道路からムルグル川の南側で右折してしばらく走った場所にある。同氏は、10年前に息子2人に家畜を分け与えたので自分の家畜をもたず、次男のバイシンに暮らしている。

ドンボさんの家の牛は「南方の人」が世話している。この人は独身で40歳以上、10数年ドンボさん宅で牛の世話をして、月に120元をもらっているという。大興安嶺北部の西北側に住むフルンボイル盟のモンゴル人は、興安嶺南の平原に住むモンゴル人を「南方の人」または「低地（ドル＝ガジャル）のひと」と称している。彼らにはジャライト旗出身者が多く、とりわけシネ＝バルガ右旗では勢力が強いと聞いた。実は私の教え子の1人アルタンガラグ君はジャライト旗出身であるが、2004年当時同君の両親はハイラル市に住んでいた。

ドンボさんは生産隊時代、羊と牛の世話をし、ゲルを持って移動していた。夏営地はムルグル川上流の南側の山がある高い場所（旗の最東部エヴェンキ＝ソムにある）で、涼しい。そこに途中泊まりながら行った。そこに約2ヶ月過ごしたのち、北方、ロシヤとの国境付近にある旗内の秋営地に移動し、雪が降り始めたら南方に移動した。冬でも10日に一度程度は移動していた。夏営地でも秋営地でも移動をしていたから、数え切れないほど移動していた。夏に羊の毛を刈る作業をする時期には1ヶ月ほどは同じところに滞在していた。子家畜が生まれる春の期間も1箇所に留まっていた。生産隊時代のドンボさんの長距離で回数の多い移動、そして冬の頻繁な移動というのは興味深い。似た事例は、かつてのシネ＝バルガ左旗にも見出せるのである（吉田順一「遊牧における移動と定着－モンゴル伝統遊牧

の立場から」『東北アジア研究センター叢書』第6号、2002年3月）。

聞き取り終了前にゲレルトの友人がジープを走らせて来た。ハイラルまで便乗できればと願ったが所用のため無理と言う。観光ゲルに戻って遅い昼食。その後19時になっても迎えが来ない。ドルナがタクシー運転手に父・祖父などの電話番号を書いてもたせ、電話を探して連絡させ、迎えの車を出してもらおうとしたが、運転手は電話番号を知っていると言い張ってメモを受け取らない。電話をしたらダシドルジ氏らに怒られるからだとはゲレルトたちの推測。客より自分の面子が大切なのだと言う。その後運転手が自分の車を牽引させようとバキュームカーをつかまえてきた。そして電話をしたがダシドルジ氏は不在であったと言い、また迎えの車が来ると話した。ドルナは、腹が悪い父が外出しているはずはない、迎えの車が来るというのも嘘だと断言。ゲレルトが再度旅遊点の友人に相談すると、明日来る100人の客のために踊り子たちを乗せた車がここに向かっているところだ。帰りは空車だからそれに乗ればと言ってくれた。

ホテルに戻ったのは、23時15分。不運な1日だったが、陽光を受けて輝きながら草原を蛇行して流れるムルグル川と岸辺でゆったり草を食う畜群の風景は、今も忘れられない。

8月9日　朝曇り、昼晴れ。6時半起床。ゲレルトが探してきた北京ジープでエヴェンキ族自治旗に出発。当初、この旗は14日から調査をする予定だったが、事情により本日からに変更したのである。この旗の面積は18750平方㎞（四国とほぼ同じ広さ）である。

車はシニヘ西ソムの集落を東側に見ながら南下。イミン（伊敏）＝ソムに入ると間もなくイミン炭鉱。その近く道路の東側チャガン＝ボルガスで戦前の日本人住居址が見えた。

イミン炭鉱の丘には日本人が掘った井戸もある。ついでに記すと、南屯付近のイミン川に、日本人が架けた鉄橋の残骸がある。これはソ連軍の空爆によって破壊され、そのさい犠牲者がたくさん出たという。その他日本時代に関わるものがいくつもある。

イミン炭鉱は露天掘りである。20年前に掘り始めて、今や人口10万の炭鉱の町（伊敏河鎮）が育っている。エヴェンキ旗の南部のステップには、大体どこでも石炭の鉱脈があるという。炭鉱のある辺りは、ハル＝ホジリン＝タルと称される豊かな草原で、オンゴルホイン＝ボラクというよい泉があり、エヴェンキ族やオールド族の夏の牧地が広がり、かつては10万頭の家畜が飼養されていたが、炭鉱のせいでだめになったという。炭鉱には発電所があり、この地に住んでいる漢人たちにとって、その煙突の高さが自慢なのだそうだ。

伊敏河鎮で、この日訪ねる家への土産を買い、イミン＝ソム政府所在地そばのゲレルトの叔母（夫は満族）宅に寄ってその息子に同行を頼み、エヴェンキ族のソムに向かった。この家は固定家屋を4つもち、父親が息子3人と使用人とで牧場形式で牛を飼っている。

エヴェンキ族の夏営地に入り、2、3軒訪ねたが、主人が不在だったり、聞き取りするに

は不適当な家だったりして、やっと見つけたのは、ホイ=ソムのオンゴントホイ=ガチャーのエヴェンキ族フデルムンフさん（33歳）と妻のオラーントヤーさん（29歳）の家であった。

調査の対象はしっかりした家、裕福な家が多く、片寄った調査となりがちである。しかし見ず知らずの外国人が突然牧民の家を訪れれば、当然警戒されるし、聞き取りを断られかねない。そこで現地出身者やソム、ガチャーの役人に案内を頼まざるを得ない。見方によっては、全地域を通じてほぼ同じレベルの家の状態を知ることができるのは悪くはない。

イミン=ソムの町からホイ=ソムに至るまで起伏が緩やかな地形が続き、そこに草が密生している。ホイ=ソムに入り、エヴェンキ旗の西の境界線をなすホイ川の近くにあるオンゴントホイ=ガチャーのエヴェンキ族フデルムンフさん（33歳）のゲルに入った。側壁と屋根の覆いがフェルトでなく編んだ葦である（下の2枚の写真。小さい写真は別の家の葦のゲルの中の状態）。妻（29歳）、息子2人、娘1人。父？と妹。計7人家族。父親が人民公社設立前に富裕であったために文化大革命の時期に差別され、所属の生産隊で労賃をもらえなかった。文革終結後の1982年に、ガチャーが保証を引き受ける「承保（daγaγačilalta）制」によって、1頭につき牛350元、羊35元、山羊20元、馬270元と計算して各家に分配し、10年以内にもらった家畜の値段分の金をガチャーに返済させると決めたさい、生産隊設立時に父が生産隊に渡した家畜の種類と数、支払われなかった労賃を、牛と羊に換算して返してくれた。その数は牛40頭、羊（山羊を含む）150匹、馬6-7頭であった。またそれ以外に、承保制によって牛10数頭、羊約100匹（山羊を含む）、馬7頭を受け取った。そこで牛50頭以上、羊250匹位、馬12-13頭となった。現在、牛75頭、羊750匹（うち山羊60匹）、馬15頭がおり、ガチャー内で最も多く、ホイ=ソムでも5指に入る。

フデルムンフさんはホイ=ソムの政府所在地にバイシンをもっている。自分がソムの仕事をしているし、子供が学校（ソムの中心にある）へ通っているからである。聞き取り後、写真を撮

ろうと言ったら民族衣装を近くの知人に借りに行くと言う。すぐかと思ったら40分も待たされた。

16時過ぎからホイ=ソムのハーフム=ガチャーのサイシャールトさん（35歳）のゲルを訪れた。家族は妻アランゴワ（34歳）と息子、娘が各一人。このエヴェンキ族の家は、フデルムンフ氏の家に近いが、所属のガチャーが異なるので訪れたのである。このガチャーの政府所在地は、ホイ=ソム政府所在地のすぐ南、ホイ川のすぐ東にある。夫も妻も口が重い。ゲレルトは、エヴェンキ族にはこの種の人が多いという。娘が勉強していた。ゲル内は質素だが、外にこの家のものらしいオートバイと自転車が各2台置いてあった。昨日訪れた家も今日訪れた家もみな、夏に牛の乳を売って収入を得ている。

その後40数km戻ってゲレルトの叔母の家に、ホイ=ソムに同行してくれた息子を送り届けた。白髪の父親が庭の隅で御馳走をと、羊を屠って解体していたが、次の予定のため茶だけ飲んで出発、イミン=ソムのアゴイト=ガチャーに向かった。イミン=ソム政府所在地から南屯に通じる幹線道路を11、12km北上し、東に折れて少し走ったところにいるオールト族のハラロー Qaraluu（26歳）さんを訪ねた。妻はダゴール族のクイシェン（24歳）。黒龍江省富裕県（モリダワ=ダゴール族自治旗の南隣にある）の出身。イミン=ソムの学校で学んだので、モンゴル語をよく話す。息子は生後約7ヶ月。

この場所はハラローさんの夏営地。地形はシル（低く平らな丘・山）。7月19日にここにオトルに来た。ソムの牧地だが、まだ分配されていないから、ソムのだれが使ってもよい。兄弟3人の羊770匹（うち山羊26匹）を連れてきている。モンゴル在来羊よりメリノー種の方が多い。父が1986年に没したとき、200匹いたが、数を増やしてから兄弟で分けることにした。今だいぶ増えたので、この秋には分けるつもりである。

牛は、兄2人のソーリ／ソーリン（定住地、居住地。ふつうバイシンすなわち固定家屋がある）であるアゴイティン=ホダク（井戸）に30数頭いる。ハラローさんの牛は、父からもらった16頭。馬は兄弟のものを合わせて23頭いる。兄のソーリの周りで放牧している。二人の兄の暇な方が世話することになっている。

主に生産隊時代を生きた父親は有名な羊飼いで、1000匹以上飼養していた。冬営地はイミン川の東にあり、そこで5、6回移動していた。そこから2.5km以東に春営地があり、そこに専用のプン（掛け小屋）があった。そこでは移動しなかった。イミン川の7.5km以西にハラートと称する夏営地があり、そこでは肋骨状に板を組んだハシャー（家畜囲い）を使っていた。夏営地にはアゴイト=ホダクという井戸、ハラ=ホジルというソーダ湧出地、また水の豊かな泉がある。春営地から夏営地に出ることをオトルと言い、冬営地から春営地に出ることを「子家畜を迎える（töl tosqu）」と言っていた。秋営地は春営地から2-5km以東に広がっていた。そのなかで3、4回移動をしていた。今は冬営地への移動、夏営地への移動

をヌーフ（negükü）と言い（後述のように、オトルとも言っていたようである）、冬営地からソーリへの移動を「春営地に行く（očiqu）」、春営地から夏営地への移動を「夏のオトルに出る」と言う。夏営地から秋営地への移動に関する特定の表現はない。

ハロラーさんは秋にはソーリの周りで家畜を放牧するだけで秋の牧地は使わないという。その理由は、各種の冬支度が忙しくて動けないからである。家畜囲い（ハシャー、ホロー）の修理、ハドランで刈り取った牧草をソムの牛が食わないように見張ること、刈り取った牧草をハシャーに運んで収納すること、牛の敷き藁を刈りとって用意すること等の仕事があるし、昨年秋からはじめたのだが、羊（メリノー種の羊であろう）の人工授精の仕事もあるからである。これらが終わってから冬のオトルに出て（otur yabaquともいう）、4月初めにソーリに戻る。

ハラロー家のゲルはハナ（ゲルの側壁）が4枚だけなので狭く、東側にダブル、西側にシングルのベッドがあるが、ふつうゲルの床の中央にある炉がない。立派な乳母車が目立った。ハラロー家はバイシンをもっていない。

ソーリに兄のバイシンが二つある。ハラローさんは春にはそのソーリで過ごす。そこに1987年に兄弟3人にガチャーから分配された土地（広さ不明）があり、春営地として使っており、兄弟3人のプン〔ズ〕すなわち家畜用の掛け小屋があるからである。ガチャーが牧地を分配したさい、ソーリの周囲の牧地の内側を牧地、外側をハドランとして使うように言われた。だが年々の草の状態によってはそういう訳にもいかない。そこでハドラン（草刈り場）と牧地を区別せず、ある年に西と北の牧地をハドランとして使う場合は、南と東の場所を牧地として使うというようにしている。夏営地はソーリの南方6.5kmの地にあり、そこにおいて4回ほど移動する。ハラーティン＝ボラクという泉があり、それを使う。寒くなると、ソーリのある場所から西方に10km離れた冬営地に入る。降雪によって冬営地の草を食いにくくなると4回、降雪が少なくても2回ほど移動する。他人のハドランや牧地に羊を入れてはいけない。そこでハラローさんはガチャーがまだ各戸に分配していない牧地を使っている。

年々牧草は悪化してきている。以前は毎年同じハドランから牧草を刈り取って問題なかったが、今は他家の家畜が入って牧草を食うのでだめである。牧地を柵で囲めばよいのだが、金がかかる。ハドランだけではなく、冬と夏の牧地の草も悪くなってきている。

羊を毎年200匹売っている。子羊1匹200元、おとなの羊1匹300元、雄のよい羊45元。羊毛を売った収入は昨年4000元、今年は3000元。値段が不安定である。羊から得た収入は兄弟で3等分している。

牛は売っていないが、乳を売っている。兄の妻が6月から10月まで搾乳して売っている。ハラローさんのウネー（3歳以上の雌牛）は5頭。1日30数kg搾乳し、その値はkg84毛である。

子牛を生んだばかりの母牛の乳は子牛に飲ませ、余った乳を乳製品にする。

年収（純収入）は3人で約2万元。税は約700元。トラクターの部品、草刈り機の部品、ガソリンの購入費用は3人で分担している。

なお分配された牧地の金をガチャー政府に支払ったことはない。生産隊解散後にガチャーが家畜を牧民家庭に分配したということはない。最初はガチャーが保証を引き受けるという承保制「ダーチラルタ（承保）」によって保証し、例えば今年羊5匹を承保し、来年に7匹に増やしてほしいという条件が出され、牧民が10匹に増やすと、3匹をもらえた。そうしてハラローさんの父は200匹の羊をもらったのである。

父の頃から羊と山羊の乳は搾っていない。

乳製品については、時間がないので、その種類を聞くだけにとどめた。

ハラローさんはしっかりしており、質問に的確に応答してくれた。

調査後、直ちにイミン＝ソム政府所在地の集落にあるゲレルト君の妻の実家に行った。立派なバイシンで、清潔。妻の父親は74歳。乳製品のエージゲーとウルムをつまんで茶飲むと、骨付き羊肉が出され、その煮汁に羊肉とインゲン、ジャガイモを加えたスープと白飯。美味であった。父親は、この辺りの羊は味がよくないと述べたが。

ゲレルトの妻の実家はエヴェンキ族のなかでも裕福であり、羊2000匹、牛80頭、馬300頭を飼い、3家族にそれぞれ羊、牛、馬の世話をさせていて、自らは一切家畜の世話をしておらず（高齢でもあるが）、バイシンに暮らしている。それでも夏には夏営地に入っていたという。共産党政権成立後、牧主だということでつらい経験をした。特に1956年からの8年間はひどかったという。現在、末子が羊と牛をかなり飼養しているが、あまり多く飼うと、また狙われるかも知れないので、そう多くは飼わないつもりだと話していた。

22時過ぎに記念写真を撮って辞去し、17km北上したイミン炭鉱にあるイミン河賓館に泊まったが、シャワー用の湯がでなかった。

8月10日　6時に起床。前日の聞き取りメモの整理をすませて洗顔しようとしたら水が出ない。起床時には出ていたのだ。仕方なくポットの湯をコップに入れて髭剃りと洗顔をした。あとで聞くと、このことなどでゲレルトは服務員に抗議したが理屈をこねて頑として受け付けない。その場に上役が出て来たので宿泊費を値切らせたというが、怠慢な服務員のためにホテルが損をした訳である。ホテルは値段が高いからイミン＝ガチャーで朝食と言うので、私は喜んで同意した。

このガチャーには、本日最初に訪ねる予定のエルデンさん（61歳）が住んでいる（次頁の写真左側。右側はゲレルト）。この人はオールド族で、妻はエヴェンキ族。同氏は1958年から1983年まで獣医として働き、1981-1984年に生産隊長を務めた。

牛70頭、羊100匹（山羊4、5匹を含む）、馬4頭をもっているが、体調不良で自らは家畜の世話をしていない。子供はよそで働いているから、家畜があまり増えても困るとのこと。

牛の世話は同居の末娘の夫がしている。漢人なので2年間結婚に反対したが、今年の初めに結婚させた。インジ（嫁入り持参家畜）として牛8頭を与えた。漢人は儲けることが好きで、ブタ2匹を飼ったり子牛の世話をしたり、暇なしで働いている。搾乳は娘がやり、人も使っている。1日の搾乳量は100kg。牛乳はハイラルの乳製品工場に1kg84毛で売っている。このあたりの牧民はみな牛乳を売って収入を得ているが、最大の収入は家畜を売ることであり、その値段はオス牛は3歳なら1000元、4歳以上なら2000元以上、羊は平均400元である。また羊毛もよい収入源である。

エルデンさんによれば、イミン炭田のある80平方㎞余の草原が国家炭鉱部によって五千数百万元の補償で買い上げられ、石炭採掘によって影響を被る場所には、煉瓦造り住居と家畜小屋等が牧民に与えられたが、牧民の反対を押し切って家の入口を北に向けた（ゲルの入口は南向き）。この炭田は上層を泥炭が占め、石炭は煤煙を多く出すので価値が低い。そこで採掘した石炭を、現地に発電所4基を設けて使うことにした。今は1基だが一日4トンの煤が出るので、4基が稼働した場合、草原への悪影響が心配だと話した。

人民公社・生産隊廃止後の牧民への牧地の分配は1982年に自治区が定めた草原法（1984・85年に国に認められた）によっている。牧地は公有であり、完全に私有のものとして牧民の家に分配することはあり得ない。エヴェンキ旗では牧地に余裕があるし、川の流れる場所、シル（前出）やホジル（ソーダ）のある場所、草のよい場所等を含む牧地を公平に牧民の家に分配することは困難でもあるので、牧民の共有とした。ただハドランは家族ごとに分配することにした。家畜も承保したのであって、完全に個人に分配したのではない。1958年の人民公社設立のさい、牧民各個人が公社に提出した家畜は、種類・年齢・性別などが克明に記録され、その記録が保管されている。それに基づいて1982年に個人に分配されたが、公社時代に家畜が増えた場合は公社設立時に提出された家畜を返すと同時に、増えた分も配分した。公社設立時より家畜が減ってしまったところでは、牧民に配分される家畜が減った。以上の分配は、牧民が完全に家畜を私有するようになったということを意味するのではなく、形式上はあくまで承保である。フルンボイル盟の家畜分配に関する指示が旗に下されたさい（当時ゲレルトの父がエヴェンキ旗の牧畜担当副旗長であった）、旗

政府では旗の牧畜の実情を考慮して、以上のように決めて実施したが、それに関して盟のほうから何か言ってくるということはなかった。

若い者は牧畜を避けて都会に出たがる。また漢語で教育する学校とモンゴル語で教育する学校があると、前者に入りたがる。しかしそれでも漢語は漢族にかなわないので成績が劣り、進学で不利になる場合が多いという。

調査後にイミン川が見える高台で写真をとり、そこにあるゲレルトの親戚（妻はジリム盟出身）が経営している店で昼食をとり、14時半に出発して北上し、シニヘイ西ソムにあるシニヘイ=スム（文革で壊されたが、1986年に再建された寺廟）を訪れたが、シニヘイ川付近に来たところで車の調子が悪くなった。幸いに運転手の知り合いが同じ北京ジープで通りかかったので、ロープで我々の車を牽引してもらって南屯まで辿り着き、ゲレルトの両親とゲレルトの末弟に迎えられた。立派なバイシンである。骨付き羊肉、野菜サラダ、トマト、キュウリの漬け物等が出され、まずゲレルトが私とヒシク教授にそれぞれ2杯の白酒（バイジュウ）で献杯、次いで父（64歳）と母（61歳）に献杯。私たちもお二人の健康を祈って乾杯。ゲレルトの母親が感激して涙を流した。その後夜10時過ぎにハイラル市のフルンボイル賓館に入った。

8月11日　朝、雨が降ったが10時頃にやんだ。北京ジープで出発。運転手は23歳の漢人。同じ北京ジープでも、政府関係の車はアメリカの部品を中国で組み立てたもので、よい車だとして車検を免れるそうである。一方この2日間故障に泣かされた2台の北京ジープはロシヤ製だという。ただし今日から使う北京ジープは前者だが、前輪のバネが弱いという問題があり、本日の調査後ハイラルに戻ってから、運転手が修理することになった。

この日、私たちは途中ハイラルのオボーを祭り、8日に続いて本日も脇を通った観光施設「金帳」の傍にある観光用のオボーも祭った。かつてラマがこのオボーを祭ったことがあるとの理由で敬意を表したのである。前回祭らず今回祭った訳は、我々が使った車が2度も故障したのはオボーを祭ることを怠ったせいではないかとヒシク教授とゲレルトが考えたからである。本日向かったのはホーチンバルガ旗のほぼ東半分

を占めるエヴェンキ民族ソムである。

ハイラル市から北上し、ムルグル川の南側を東進して1軒のバイシンを見つけたが、その主人は今から出かけるからと聞き取りを断り、少し先のアルシャー＝ガチャーの長の家を教えてくれた。そこを訪れると、子供しかいない。黄色の毛髪で肌が白い。この家の夏営地はムルグル川の上流にある山の向こうだと言うので、その方向に車を走らせバイシンを一つみつけたが、誰もいない。さらに進んでやっと3軒のバイシンとトタンで覆われたゲルがある場所に至った。そのゲルこそ、アルシャン＝ガチャーの長兼共産党主席のウルジーさんの家であった（前頁の写真）。北のはるか彼方にこのソムの政府所在地であるアダガンノールが見える。

ウルジーさんは不在だったので、隣のバイシンに住む弟妹から聞き取りをした。ウルジーさんのゲルはウフン＝ゲル（ökün? ger）である。これはゲルを建てる場所を円形に掘り下げてその上に組み立てるゲルである。こうするとゲルが暖かくなる。私はエルグネ右旗で、同旗に住むロシヤ人の木造家屋をみたことがあるが、地表をかなり掘り下げて、その低い床の上に家を建てている。これも寒さ対策である。屋根の位置が非常に低いので、相当近寄らないと家があるかどうかわからないほどである。

ウルジーさんたちのソーリは、アルラン＝ウンドルという山のふもとにあり、10月初めから6月まで利用する。ガチャーの共用地である。その西5kmの低平な丘にウラーン＝ガザグという夏営地があり、6月10日から10月初めまで滞在する。そこはガチャーの牧地で、10数戸が使っている。その南にも夏の牧地をもっている。秋用に使う牧地はない。ハドランすなわち草刈り場は1982年に牧民家族に分配したが、ウルジーさんの3家族はそれを牧地と明確に区別しないで使い、牧地のうち秋に草を刈った場所（牧地の半分ほどの広さ）がハドランであり、残った場所が牧地だという認識である。だが毎年同じ場所で草を刈っているというから、両者の区別がないとまでは言えないようである。今年は8月8日から刈り始めた（7、8人で草刈り機を使用。人は雇わない）。牛と羊には12月から翌年5月までの期間は、夜干し草を与え、家畜小屋・家畜囲で休ませる。馬はいつも（冬でも）勝手に草を食べさせる。ウルジーさんの家畜は現在羊二百数十（山羊20）匹、牛50頭、馬8頭。羊の世話は学校が休みのときは子供たち、学期にはウルジーさんがする。

6月初めから9月まで120日間、牛乳を売っている。16頭のメス牛の乳1日80-90kgを1kg84毛で売っている。牛乳を売っているため、乳製品はつくっていない。他に冬は木材を〔ハイラルに〕運んで得る収入、春に牛を少し売って得る収入がある。

税は家畜1頭につき、牛5元、羊約2元、馬5元？

牧草が悪くなっているとは感じない。乳製品については省略（13時50分－15時20分）。

ウルジーさんが不在のため、生産隊時代のことなどは、聞き取りができなかった。

聞き取りはエヴェンキ語、ブリヤト語、モンゴル語が飛び交った。ゲレルトは妻がエヴェンキ人、母がブリヤト人なので、通訳に苦労した様子はなかった。

その後昼食のためにエヴェンキ=ソムの主都アダガン=ノールに出かけたが、1軒だけある食堂が満席で、肉もなくなったという。そこでやむなくこの町を出て、聞き取りのために牧民の家を訪ねたが、そこの主婦は自家の牛は搾乳したが、近隣に主婦が不在の家があり、その牛の搾乳に出かけなければならないと、断られた。他の家を2軒訪れたが、それぞれ事情があって断られた。この時期男は草刈りで忙しく家におらず、女は搾乳に忙しい。このとき、馬に乗り人民服のような服を着た羊飼いの男に出会った。ゲレルトが道をたずねたのに対して漢語を話していたが、明らかにロシヤ人の顔つきをしていた。

時間がますます経ち、運転手の腹のことも考えなければならぬということで、ハイラルとエルグネ右旗の主都を結ぶ幹線道路のそばにある七一牧場に行き、まず同牧場の党主席の家を訪れた。黒パン、スーティチャイ、乳製品、果実の砂糖漬けが出された。

主席の家のホイモル（上座）に小さな仏画が飾られていた。ホーチンバルガ旗の人びとはエヴェンキ族も含めて仏教ではなく、シャーマニズムを信じており、仏を「モンゴルのボルハン（仏）と言っている。そこでヒシク教授とゲレルトは、彼らは仏を「モンゴルのボルハン（仏）」と言っているから、彼らのシャーマニズム信仰の上に、新しくモンゴルの仏教が流布したことを意味するだろうと話した。

次いで東の方にエヴェンキ族のオボーを見つけ、立ちよった。石を高く積み重ねて頂部に木の枝を多数刺し込んだ中心のオボーの東西南北それぞれの方角に小さい石積みを三つずつ配した形状で、中心のオボーの東と西の方角に積み石をそれぞれ六つずつ配したモンゴル人のオボー（13オボーという）とは形状が大きく異なる。13オボーには仏教の影響があるとするバンザロフの説をめぐって3人で少し議論をし、オボーを右回りにまわりつつ白酒（バイジュウ）をオボーに振りかけて祭った。このオボーがある山の周りは山裾まで耕地が迫っている。これはフルンボイル盟長ウルジー氏が草原の耕地化に積極的に推し進めた成果であり、同氏が内モンゴル自治区の主席に出世した理由の一つだと聞いた。

さてやっと七一牧場にある小さい食堂に入ったのだが、まことに汚い。漢人農民らしい家族が食事をし、白酒やビールを飲んでいた。私たちはピーマンと肉、セロリと肉を炒めたものと拉麺をとった。当日は雨のため室内が薄暗い。隣りの客が電気を点けるように頼んだが、店の主は応じなかった。

ホテルに戻ったとき、フルンボイル档案館（公文書館）勤務の中央民族学院（現中央民族大学）時代のゲレルトの同級生に出会った。彼によると、同館には清代の档案は数冊しかなく、多くは史料という名目で館外に持ち出された。旗の清代の档案は、モリダワ旗の档案館によく残っており、ホーチンバルガ旗の档案館にもある程度あると話していた。

私がフルンボイルにいたとき教え子の井上治君が呼和浩特市にある内モンゴル社会科学院に留学しており、たまたま研究のためにフルンボイル来ていた。井上君から20時にホテルに電話をよこしたが、電話の故障でなかなか私に連絡できなかったと言っていた。ゲレルトの父の家の電話も故障していたという。あれこれと故障が多い。

8月12日　8時にゲレルトが航空チケットを受け取り、今日からの旅のためにパスポートをもってきた。ゲレルトが戻ってくるのは11時位になるかも知れないと思っていたが、案外早かったので、一安心。こちらの人は朝勤務先に来てもすぐいなくなり、つかまえるのが難しいという。何をしているのかというと、友だちと会ったり、酒を飲んだりしていることも多いらしい。そこで勤務先に顔を出す朝のうちにつかまえることが必要だという。

9時10分、ホーチンバルガ旗に向かった。車は北京ジープ。時速170km。ハイラルから24kmのところにある同旗の主都バヤンフレー鎮に立ち寄り、新華書店で本を購入。再び出発し、満洲里に通じる幹線道路を西に約36km走って、道の北側に見える家を訪ねたが、主人が病気というので辞去し、少し先のやはり幹線道路のすぐ北側にある家を訪ねた。

ジューンウジュール（東ウジュール）＝ソムのエルデニオール＝ガチャーの牧民サンディさん（66歳）の家である。バイシンの西100mほどの場所にゲルが二つあり、その南側300mくらい離れたところが少し窪んで、湖がある。ゲルの屋根と側壁は編んだ葦（qulus/ホルス）で覆っている。南約300mの窪地に池がある。ここは冬営地でありソーリである。バイシンの傍に井戸があり、家畜小屋（プン）、掛け小屋（サラブチ）がある。

家族は妻（59歳）、娘4人、息子3人。長男はこのガチャーの長、その妻はソムの役所に勤めている。次男夫婦（息子が一人いる）はサンディさんと同居し、牧畜と家計は一緒である。他にサンディさんの弟の子供すなわち甥もサンディさんのところでゲル暮らしをしている。この甥はかつてここから離れた場所にいたが、乳を売ることのできる場所、すなわちハイラルの乳製品工場から乳を集めに来る場所を求めてここに移って来たのである。

文革終結後の7、8年前に分配された牧地は、東西約30km、南北約25kmに及ぶ。マンギル、ターナ等のネギ・ニラ類の牧草があり、ホジル等のソーダ類があり、そして湖がある、よい場所である。そのほぼ中央にソーリがあり、冬営地である。分配地の南部を春営地に、北部を夏営地として使っている。

10月頃になると、羊を南方にある起伏に富む土地（bulduruu/buldiruu）？に入れて、シャバグ（ヨモギの一種）を食わせるとよく太る。雪が積もったとき、東北方にある他のガチャーの低平は丘陵（shil）の牧地を利用することもある。冬の最も寒いときに家畜を西北方のシュートという湖のあるところに連れて行く。ホジルを食わせれば、体が温まるからである。そこにシューティン＝ザヴォードという工場がある（ザヴォードはロシヤ語）。

ハドラン（草刈り場）は上述の牧地の約15km東方のサルヒトと言う山の西にある。ソムから分配された土地である。山の麓なので草がよく生える。柵で囲っていない。8月1日から9月にかけて約3000プード（1プード＝16.5kg）ほど刈り取る。刈り取るのはハドランの一部である。他の者がハドランを使う場合には、その者と共同で刈り取る。この場所から草を刈り取って売っている人もいる。

ハドラン利用税はガチャーに払っていないが、今後取られるらしい。牧地（草原）利用税も払っていないが、家畜税は払っており、これが草原利用税ではないかと思っている。

現在羊600匹以上（山羊30数匹を含む）、牛40数頭、馬40数頭がいる。羊は1000匹以上いたけれども、末子と妻の病気の治療と子供の結婚のために多数売ってしまった。

文革終結後に家畜が牧民に分配されたが、第1回目は人民公社が設置されたときに公社に提出した家畜の数に従って各家族に家畜を配った。第2回目は家畜を家族数に従って分配した。そしてサンディ家では羊300匹（山羊も含む）、牛10数頭、馬20数頭を受け取った。このとき息子は学校に通っていなかったので分配の対象にはならなかった。

羊は1年中サンディさんが世話をしている。目が弱くなったし、防寒具が重くて馬に乗れないので、2年まえから冬の最も寒い時期には人を雇うようになった。バルガ人である。漢人は雇わない。漢語がわからないからである。賃金は月にだいたい200元（羊の数によって異なる）支払い、他に冬のイデシ（冬春用に用意した肉）、日常の食べ物も与えている。日常の食べ物を貨幣で支払うこともある。　羊は冬にオトルをするが、そのさい牛を連れて行くこともある。オトルにはサンディ家の牧地を使う。

牛と馬は次男が世話をしている。

春は子家畜を生ませるための設備が必要であり、45日間ぐらい動けない。

干し草は、11月になると2歳牛ややせている家畜に与える。ふつう3月まで干し草を与えるが、やせた家畜には4月まで与える。

サンディさんの家では乳を売っているため、乳製品は造っておらず、ただ乳茶（スーティチャイ）だけは私たちに出された。時間が昼食時にまたがっていたため、塩漬けの羊肉を炒め、それに水を注いで沸かし、乾麺を入れて作り上げたラーメンを出してくれたが、美味であった。サンディさんは、牧地について実に豊かな経験と豊富な知識をもっている。

なおサンディさんは、父はシャーマンであった。そのシャーマンの使う道具類が北京に持って行かれ、現在所在が判らなくなっていると話した（11:00時-13:10）。

サンディ家を出て、満洲里（マンジュール）に通じる幹線道路はこの辺りから南西に向かうが、それを約50km走るとシネバルガ左旗のガルバル＝ソムに入る。そして道の左側すなわち東側にゲルが二つ見えた。その一つ、丘の麓の家に車を寄せて話をしたが、よい聞き取りができるか疑問を抱き、丘の上にある別の家を訪ねた（次頁の写真）。するとそれは、

昨年度にゲレルトが宇野伸浩、柳澤明、井上治、永井匠君たちを案内した家であることが判った。

この家は、シネバルガ旗最北のガルバル＝ソムのイフオール＝ガチャーに属する。家族はショダルガ（29歳）と妻トヤー（28歳）、その息子と娘、ショダルガの母ビャンバ（63歳）。あいにくショダルガさんは不在だったがビャンバさんが質問に答えてくれた。ショダルガさんはこの日は馬群の世話のために出かけていた。

文革終結後の1982年に、家族の労働力数に基づいて人民公社の家畜が分配された。1労働力に羊95匹、牛7頭、牛とほぼ同じ数の馬が分配された。トヤーさんの家の労働力は3人とされ、羊約260匹、牛20数頭、牛と同じ数の馬を得た。このときソム政府に勤めていた長男は労働力と認められなかったが、牧畜していたその妻が労働力と認定された。人民公社設立のさいこの家が人民公社に提出した家畜の数が考慮されることはなかった。

その後長男の妻が分配された家畜を連れて去った。長男がソムの仕事をやめたのちの1990年に長男に羊300匹、牛30頭、馬8頭を与えた。

この夏、羊の世話をさせるために低地のモンゴル人を新たに雇った。この人はジリム盟の出身で、前にも、別の家で羊の世話をしていた。低地のモンゴル人はこの地に仕事を求めて来るのである。雇った人には月に300元を支払い、食べ物も与える。服も与えることがある。そして同じゲルに住んでいる。

牧地、草刈り場はまだ牧民家族に分配されておらず、ガチャーの共有物である。

現在羊500匹（うち山羊約50匹）、牛30頭、馬20頭を飼っている。羊は旧暦の11月から翌年4月までソーリで世話をしている。そこは冬営地と春営地を兼ね、プンとサラブチがある。ただしバイシンを建てていない。旧暦5月上旬に夏営地に入り、すぐ草刈り場（ハドラン）のある方に移動する。

牛と馬は、ここから西南の方にいて、長男（50数歳）が面倒をみている。牛の乳は売っておらず、すべて乳製品をつくるのに使っている。

ハドランから刈り取った干し草は小トラクターで40台分の量になる。干し草は、2歳の牛や羊、子羊を孕む親羊に与える。吹雪のときには全家畜に与える。

草の状態は非常によく、従ってハドランの草の状態もよい。

羊は100匹以上売る。一匹の価格は、4歳羊400元、よい雄羊500-600元、0.5歳の羊200-300元。牛は3頭程度売る。よい牛は1頭4000-5000元である。馬は春に6、7頭売る。1頭1000元程度である。またモンゴル羊の毛を約3000元で売った（0.5kgで2.8元）。

税は、草原管理費と家畜税を計4000元支払っている。羊と山羊は1匹2.8？元、牛と馬は1頭5元である。

乳製品の造り方は説明を省略する。乳茶（スーティ＝チャイ）を出されたが、薄味で塩が入っていないという特徴がある。

御礼に白酒（バイジュウ）、茶、缶詰、缶ジュースを渡すと、乳製品をお返しにくれた（14:20-16:00）。

私たちは、ショダルガ家を出て満洲里（マンジュール）を目指したが、車の調子がよくない。運転手が車をいじくったためではないかと皆が推測した。途中、数台の車を連ねてハイラル方面に向かう上海副市長の一行が草原に降り立ち、羊群と騎乗した牧夫の写真を撮っているところであった。私たちも下車して、写真を撮った。すでに薄暗く、よい写真は撮れなかったが。

再び車上の人となり、次にダライ湖（＝フルン湖）とハイラル川・エルグネ川方面を結ぶ水路に架かる新開河橋（左の写真）を渡った。この年雨が多かったためフルン湖が増水し、同湖からエルグネ河に向かって水が勢いよく流れていた。

19時に満洲里市の西山ホテルに入った。同ホテルの胡総経理はドルナの父と懇意であることから、私たちは歓待された。胡総経理の祖父の時代に広東から満洲里に来て住みついたのだという。施設は豪華でホテルはなお拡充中である。この夏、鄧小平の息子がフルンボイルを訪れ、満洲里にも来たとき、このホテルに泊まったという。

8月13日　6時起床。例によって前日のメモを整理・補充し、7時半朝食。ホテルの胡総経理（社長）も同席。8時出発の予定であったが、ホテルのミスで出発が30分遅れた。

満洲里の市街をホテルの胡総経理とともに見学した。市街の設計はロシヤ人が行ったという。街路の幅が少し狭い。ロシヤ領事館であった建物や日本領事館であった建物がある。

現在、旧日本領事館は店となっており、旧日本軍の兵営（次頁の写真）は中学校となっている。兵営の中央の建物は火事で焼失したため、新しい建物が造られているが、両脇の黄色い建物は当時のものだという。向かって右側の建物は、ガラスが破れていて廃屋であるように見えた。

郊外に日本人墓地とロシヤ人墓地があったが、文革期に破壊された。日本人墓地には墓石の台が見た限りでは2基残っている。その一つの傍には倒れた墓標があり、文字が少し読み取れる。昭和17年に隊長が死亡し、その息子か親かが墓を建てたとある。

満洲里が外国人に開放された1980年代初めに、日本人観光客がある程度来た。胡総経理によれば、当初彼らにも満洲里側にも緊張感が漂っていた。彼らはこの町に初めて来たと言いながら、例えばある漢人親子の消息を問うた者がいたりした。その日本人客を接待した者は「知らない」と答えたけれども、実はその親子のことをよく知っていたと言う。

この地に観光資源が多くないこともあってか、その後日本人観光客はあまり来ていない。

満洲里は人口14万人。1982年以来、急速に人口が増えた。現在ロシヤ人の建造物にまじって漢人の煉瓦造りの建物が増えており、同時に階数の高い建物が相当増えている。ハイラル市と同じく、ここにも広東、福建の商人が夏季を中心に数多くやって来て、靴の修理や洋服売りその他種々の商売をしている。冬季には郷里に戻る者も多く、明らかに市の人口が減る。通過人口、流動人口は14万人の倍はいるという。

近くチタに中国領事館ができ、満洲里にロシヤ領事館ができると聞かされた。

9時10分に、胡総経理と別れ、シネバルガ右旗に向かい、ダライ湖（フルン湖）の西側を南下した。